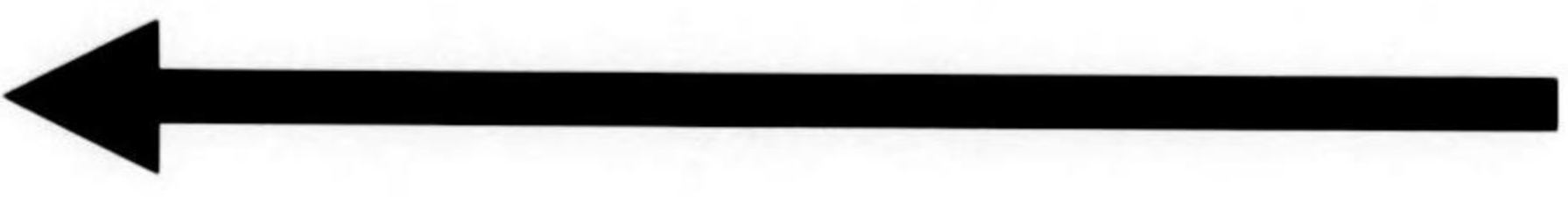


0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25

始



張柳邨花寺山水帖

全

序

張彦字は仲子、號柳郎、又秀道人、其の傳記を詳かにすると能きないは遺憾であります。その作風や題  
款の注文から推せば乾隆或は嘉慶年間の人であります。今その作風を看るに、花卉山水共に溥雪やに私淑する所  
多く、花卉の如きは溥雪の根本にあらずやと思はせる位で、その題款の筆蹟も溥雪に似たる点が頗る多くありま  
す。唯だその品格に於いて、溥雪の醇厚、澹雅の致趣の稍り稀薄なるを覚ゆるのであります。その手法に於いて  
は、尤も溥雪を學び得たことを認めらるゝのであります。それ故陳氏間法手法の巻として、又清朝四風の「一  
作例として見るべき者であると思ひて、是同行する次第であります。因みに溥雪の間風に存して細か左  
に記させよ。

溥雪、名は格、諱本は其字、一字正叔、莆田と號す、又自號外史の號有り。詩文に工みに、好んで山水を畫  
く、後王右谷を知るに及んで、山水を以て優るべからずと爲し、専ら花卉を作り、北宋の徐崇嗣を學び、時習を  
一洗して寫生の正派を開く、王右谷を誦して、寫生而謂、精確、賦色明麗。天機物態畢く毫端に集ると賞揚  
してなす  
右の如く溥雪は山水師では、同時代の王右谷に敵し難いこと知つて花卉の寫生に方向轉換をよつて一代の宗師  
として尙ほるゝに到つた。而して其の調格は遂に王右谷の賞揚の如くして、爾來南宮宗画花卉の手法の溥雪に依らな  
いものも無いと云つても宜しい。我が邦、華山、特山等の花卉は溥雪を祖述したものであります。當今花卉静物  
を揃く作家多くを加へつゝある状況に於いて、此の調集の如きも何等かの一助となるのであらうことを願ひます  
大正拾參年七月

編者識

目次

- (一) 牡丹圖 絹本着色 編輯者張柳郎 福島縣 葛西千秋氏藏

- 自畫指五 花卉山水圖 絹本着色 編輯者張柳郎 公 氏藏

大正 18726 内交

41-14



人間瑞花無配色異在人筆  
莫認是紅顏天上祥雲陸栽培  
更待誰經早寧慎憚天生富  
貴婆開落驚凡奇

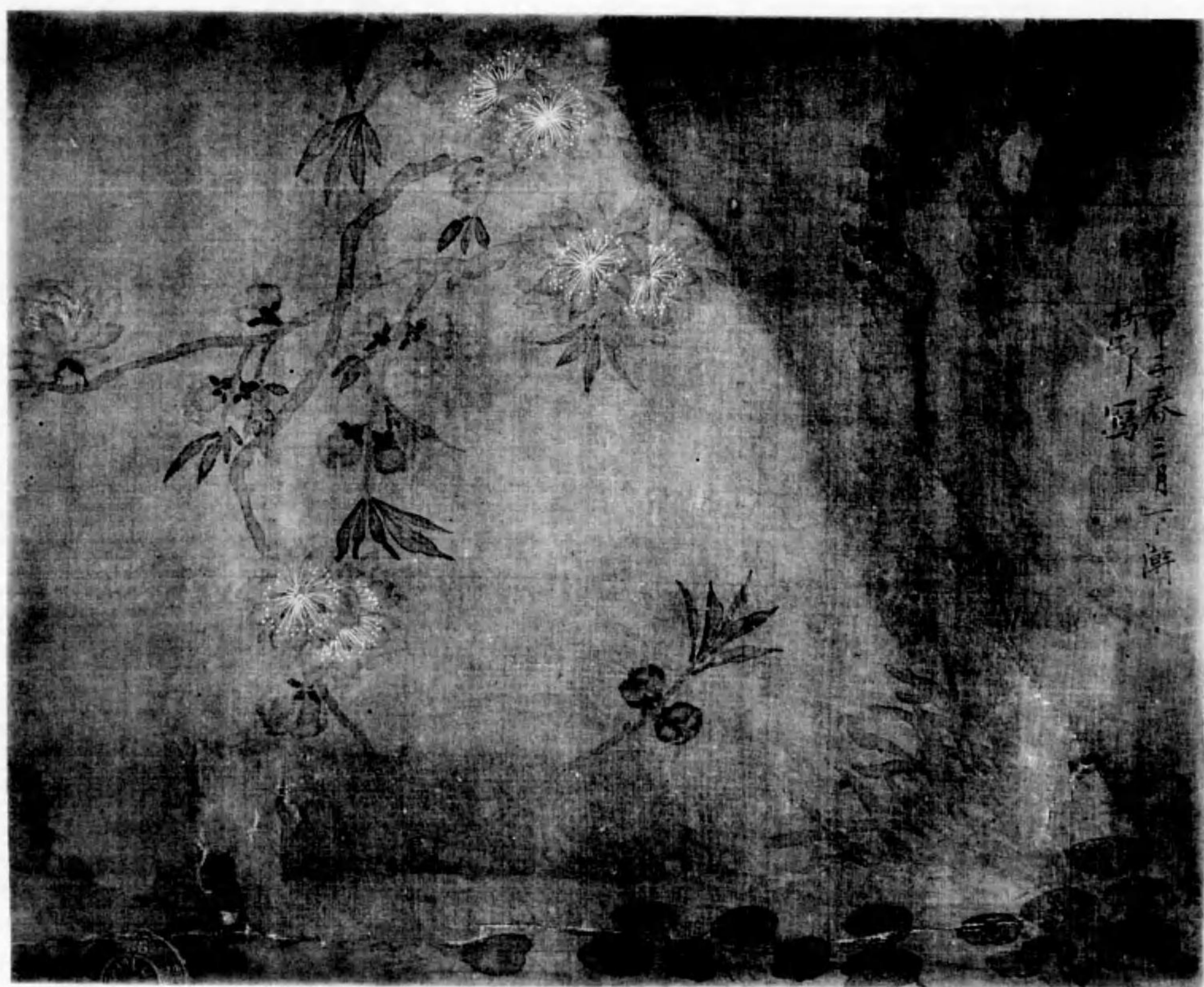
右詞醉花間 愛泉散人寫





憐他  
放獨  
合助  
詩  
人清  
氣味  
欣  
本  
淡  
白  
深  
紅

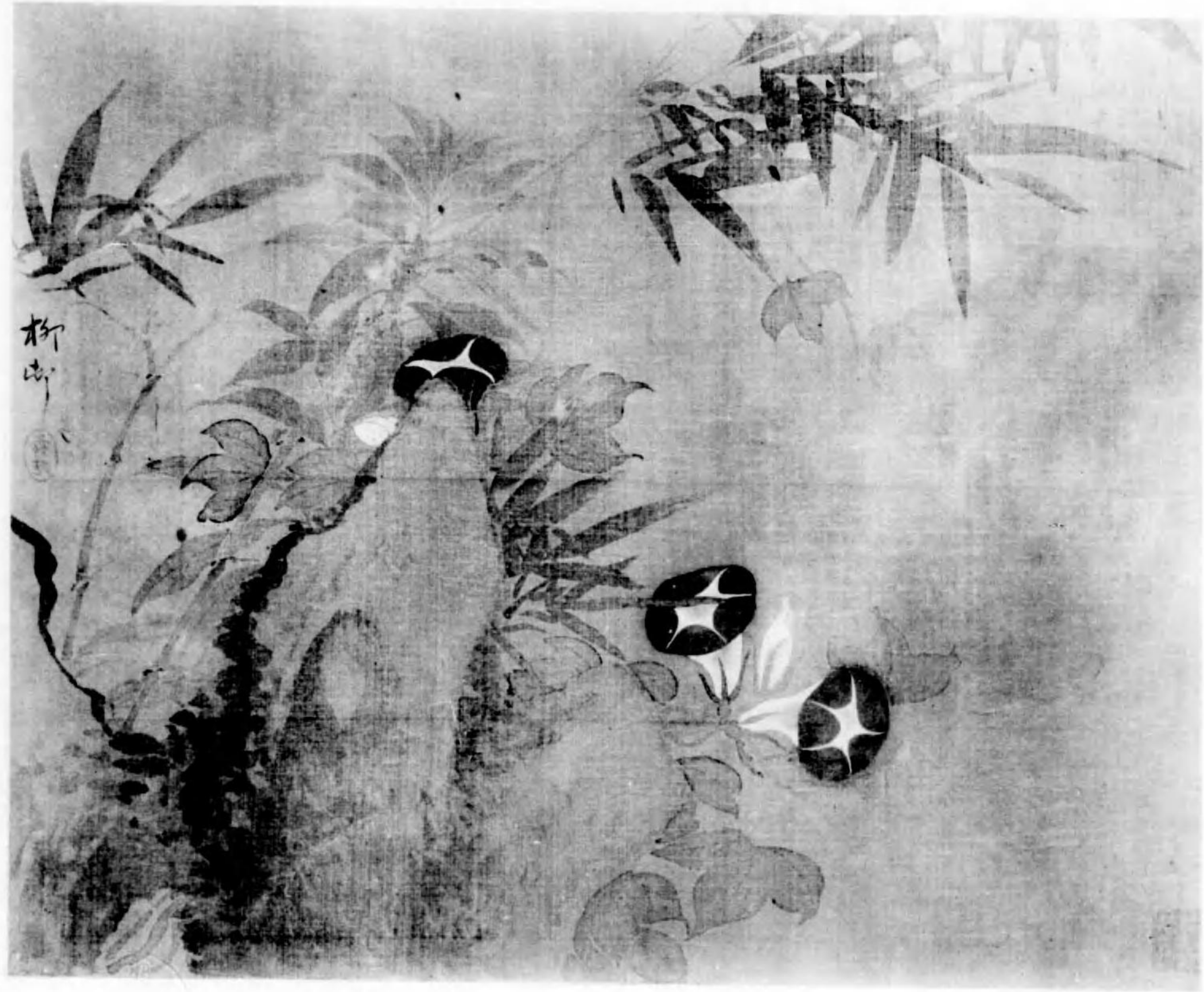


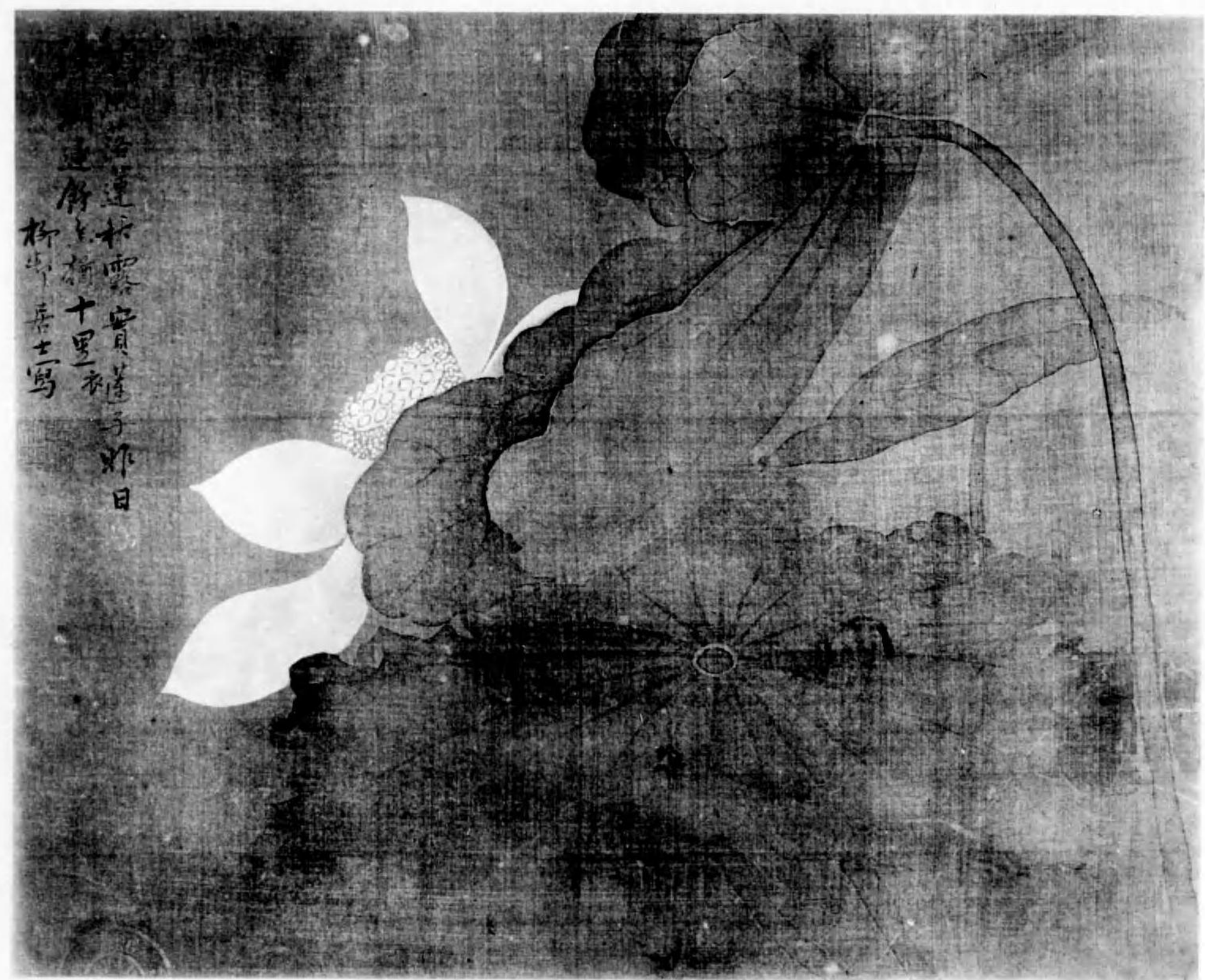


甲子春三月一日  
海

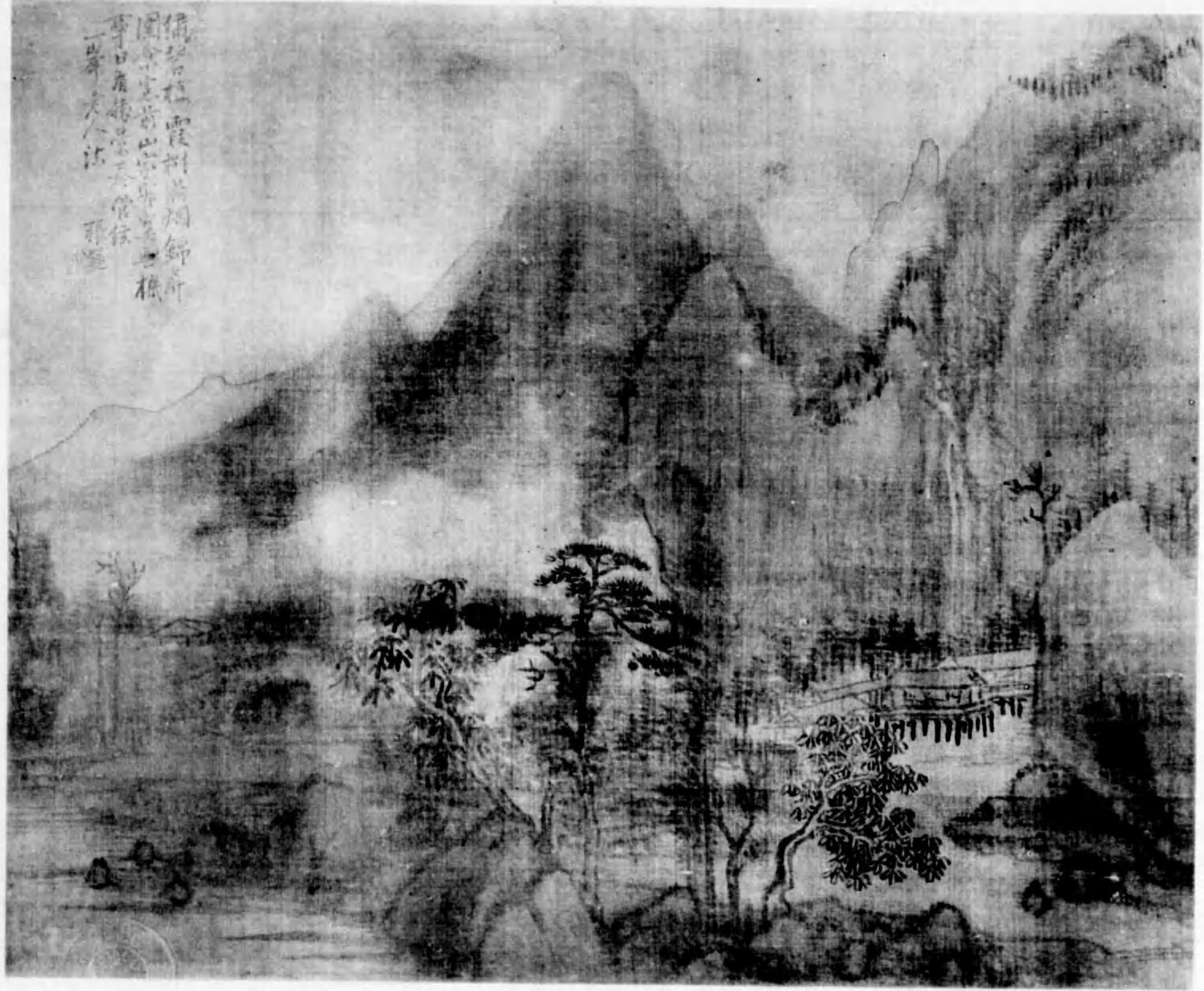


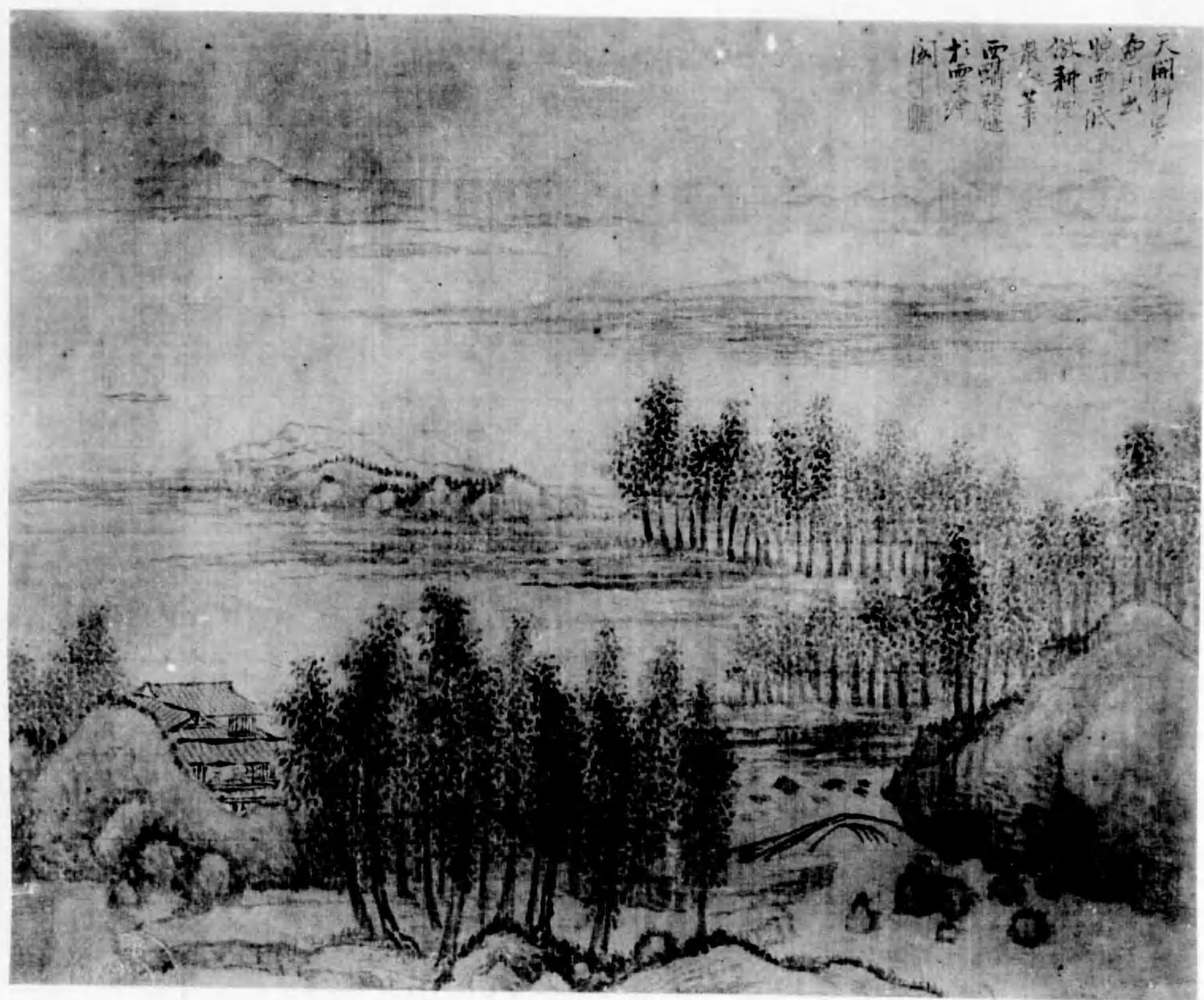






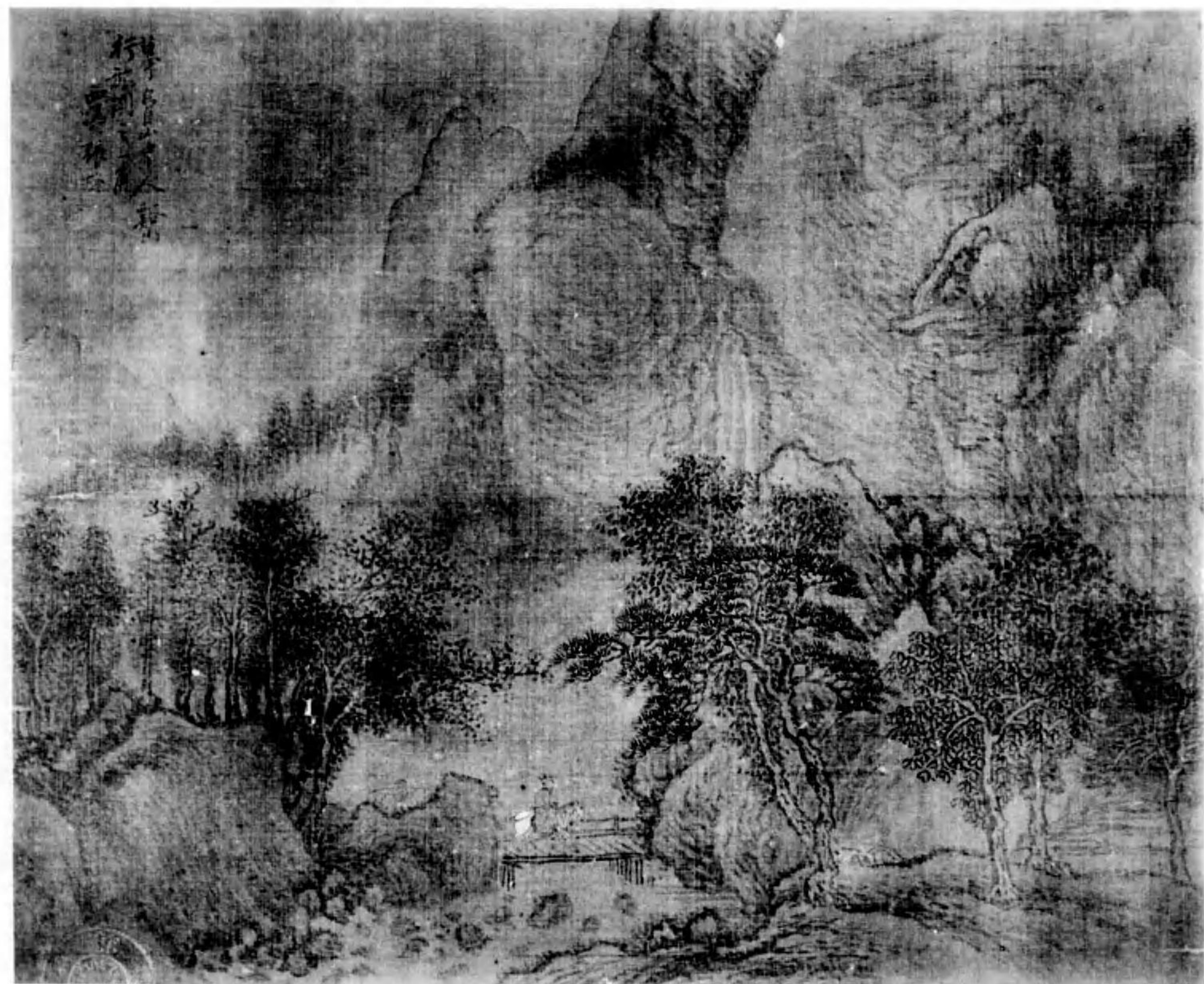
蓮花  
雲  
安  
貝  
蓮  
子  
昨  
日  
十  
里  
衣  
柳  
亭  
書  
士  
寫

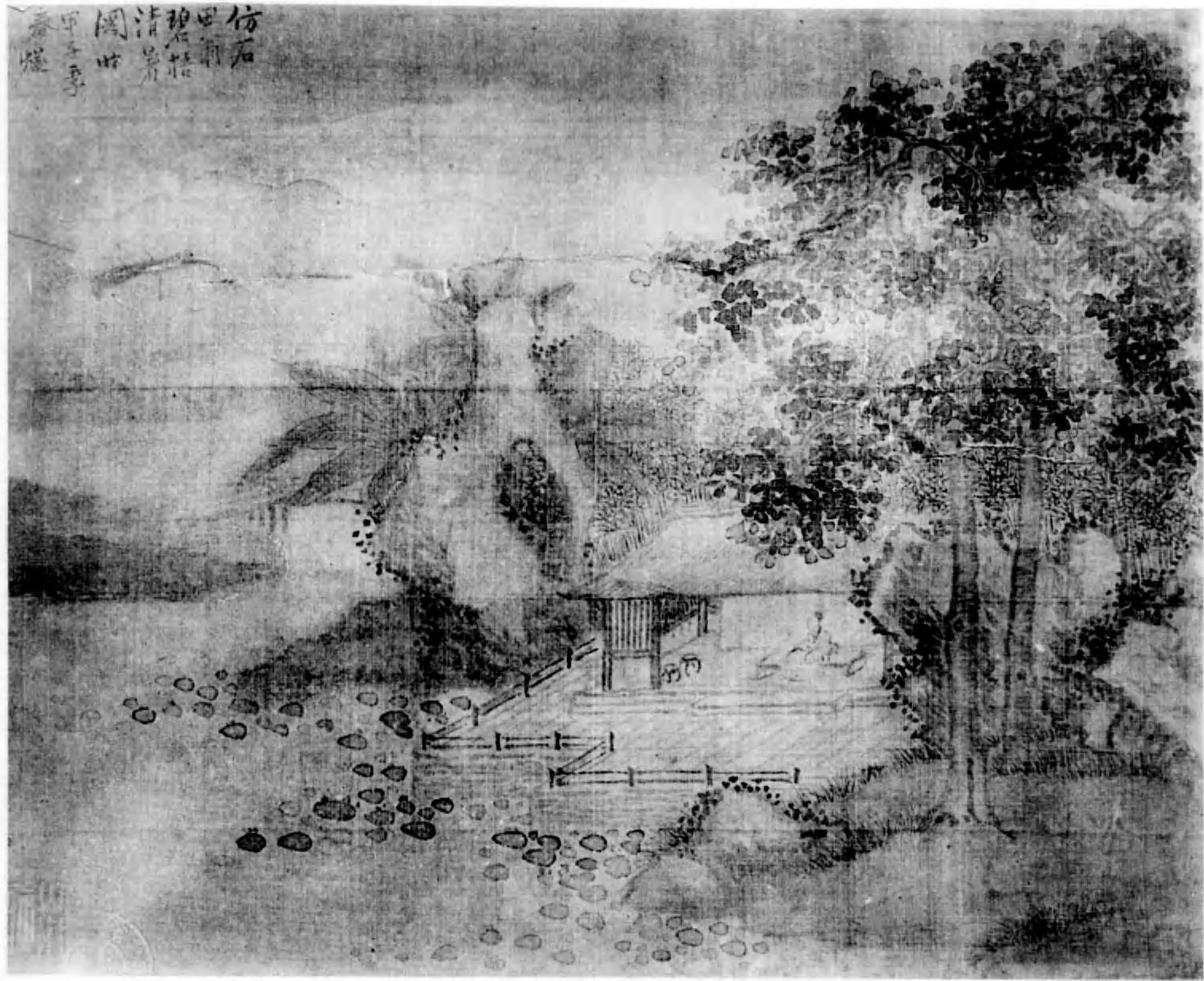




天閣御景  
在山上  
欲種何  
農人苦  
西陽隱  
水雲清  
何寸關













大正拾三年七月十日印刷  
大正拾三年七月五日發行

京都市豐樂院中町六番地  
編輯發行所 後藤 博 山

印刷所 平安精華社出版部

發行所 平安精華社

京都市豐樂院中町六番地  
定價四圓五拾錢

終